

センパイに 聞いてみた!!

まつかげ農園

大浦 かおりさん

’85年、東京都出身。短大卒業後、都内で3年間OLとして働いた後、群馬県・嵯塚農園で半年間農業経験。積み、城里町に移住。先に就農をしていた中山さんと合流をするも、収穫等の手伝いをしながら一般企業に勤める。3年後の’14年、「まつかげ農園」に正社員として就農。

中山 祐美加さん

’85年、神奈川県出身。短大卒業後、日本農業実践学園で1年間研修。その後、群馬県・嵯塚農園で3年間働き、就農を決定し、城里町の農家で2年間の研修を経た’12年に役場などの支援を受けて独立・就農。’14年からは、大浦さんも正式に参加し、女性2人の「まつかげ農園」となる。

中学生の時に農業の後継者不足について聞いたという二人。同じ高校を卒業後は別の道へ。中山さんは城里町の隣、水戸市にある農業実践学園を経て農業法人へ就職。大浦さんは都内でOLへ。しかし数年後、大浦さんは、中山さんの居る農園で働く事となり、そこで互いの就農への志を確認し合ったそうです。

「2人で独立したら楽しいよね。女性農園を立ち上げたら色々な可能性のある農園にできる」とイメージをふくらませ、新規就農を目指して城里町に来ました。

最初は、城里町で新規就農をした、実践学園での知り合いの元で、中山さんが2年間の研修を、その間、大浦さんは別の仕事をしていたそうです。これは当初からの計画で、2人で専業になるのは軌道にのってからと決めていました。その間に家を借り、徐々に地域に溶け込んで来ると……土地が空いてる、という情報をももらえたり。「人柄の良さとか、研修期間にいろいろ知り合えた。それが移住を決めたきっかけです」と中山さん。

現在、主に作っているのは農協向けにほうれん草に小松菜、生姜、他に直売所向けの枝豆やオクラと、夏野菜は何十品目にものぼる。



冬にはネギやほうれん草、干し芋、乾燥生姜。品目数もさる事ながら、加工品までというので、大変では？と聞くと、「大変ですが一人よりは全然」と中山さんは笑う。「農作業をする上で、二人でやる方が効率もいいし……出荷などは時間が取られてしまうので、そういう時は一人が栽培、一人が出荷という事ができます」

中山さんは栽培、大浦さんは営業と、得意分野に比重を置きつつ、時期によってバランスをとっていくそう。しかし時には衝突もある。長年の間に育ってくるやりがいやプライド。「そこに入ってこれるとケンカになる」そう言うそばから大浦さんが、「でもあまり引きずらないよね。その日で終わり」と間髪なく笑う。

東京にはやりたい事がなかった、と中山さん。「東京では稼いで使う事が生きがいという感じでしたが、今は自分の好きな事をしてお金が増えていく」感覚が変わった。それがやりがいに繋がっているという。「朝日と一緒に起きて、それを見ながら枝豆や小松菜を収穫したり……土に触って、本当に生きてるなあ、と。作った野菜をお客さんが食べて喜んでいただけると嬉しい。そういったところにすごくやりがいを感じ」ていて、それが楽しいと大浦さんは言う。

もちろん自然に囲まれている暮らしやすさもあるが、それ以上に、「農作業をしていると近所の方が声をかけてくださる事が多く、かといってそんなに立ち入ってくるわけでもなく、丁度いい関係が作れています。近所の方もとても優しくしてくださるので、そういったところがすごく新鮮」に感じている。

「今は2人の女性農園ですけど……」中山さんはそう言って、「これからは農業をやりたいという女性が沢山出てくると思うんです。それぞれの思いを持った女性に集まってもらいたい」と続けた。大浦さんも、新しいアイデアや展望を持った女性を待っていると話す。最後に、これからの願望は、との質問に「いろんな女性が集まれば、一つの大きなものになれるはず」と力強く答えた。

田口 優子さん

田口 優子さん

茨城県高萩市出身。2004年、水戸市（旧内原町）から城里町に移住。消防団、桂太鼓連をはじめとした様々な地域活動に積極的に参加し、地域と密な交流をはかっている。ふたりの息子さんと家族4人暮らしのお宅には、子供たちの絵や写真などが所狭しと飾られていて、暮らしを楽しんでいる様子が伝わってくる。

茨城県の北部、高萩市出身の優子さんは、2004年に城里町へ移住してきました。候補地探しに訪れた際、「こんにちは」と気さくに声をかけてくる小中学生や、公共施設での対応に親切心と温かみを感じ、移住を決めたと言います。

元タインドア派だったという優子さんは、引越後しばらくは仕事にはつかず、庭で日用大工などをして過ごしていたそうです。そこに、近所の人が気軽に遊びに来ては喋ってという、のんびりと過ごす日々。そんな中、小学校の講師を始めてしばらく経った頃、お子さんが生まれ、彼がきっかけとなってこの地域にさらに溶け込んでいくようになりました。

城里町では、保健センターや保育園、幼稚園と様々な場所で子育て支援が実施されています。優子さんは子供達を連れ、曜日ごとに違う場所へど「遊び」に通ったそうです。そこでは「子育て支援のために、先生がわざわざいろいろ指導してくださって、なんて素敵な町なんだろう」と思ったと言います。その後、幼稚園や学校で再会したお母さん達は「あの時子育て支援にいたよね」と、自然に繋がりが広がっていきました。

幼稚園の友達の影響で参加する事となり、4年経った今も続いているサッカー少年団。「一緒に遊んでいる時間はとっても幸せ」と子供たちを見ながら言って、さらに続ける言葉には、もっと魅力的な交流があるようです。「母親としても教わる事がいっぱいあるんです。私の持っていないものを皆たくさん持っているの、見て教わりながら、ああいう風にすればいいんだ」とか……親子サッカーやイベントも、協力して乗り越えていく感じで、絆が深まります」。

移住前には、あまり地域活動には参加していなかったという優子さん。しかし、子育て支援でとてもお世話になったという思いと、アットホームな空気や温かさに触れていくうち、いつかお返しをしたいという感情が自然に湧いてきたと言います。そしてそれはさら

に広がり、今では多くの地域活動、団体に参加しています。学校の役員を始め、得意とする英語を生かした「絵本を読み聞かせ隊」、和太鼓の「桂太鼓連」に女性消防団など。それらは皆、お母さん方の情報交換の場も担っていて、さらには参加している親子が、優子さんの子供達にとって第2、第3のお父さんやお母さん、兄弟達のように、まるで家族のように感じていると言います。何度か口にした「アットホーム」という言葉は、これらに依ることも大きいのかも知れません。ただ同時に、「子供達には絆やこの町にとらわれる事なく、それぞれの持ち味を活かして自分らしく生きて欲しい、そのために、どこでも生きていける力を身につけて貰いたい」と言います。和太鼓や地域での交流は、そんな思いの延長上にあるようです。

「地域の人達と学校がより繋がって、お互いに楽しみながら関わっていけたら、子供達もいろんな人と関わり合えるんじゃないかな」子供達を中心に据えながらも、これらの地域活動を通して、自分と家族、学校、そして地域から町、その成長を願っているように見えます。「移住してきてよかった。本当に温かい町」そう言う優子さんはまた、「いろんなチャレンジが出来る町だと感じて」いるそうで、これから城里町で挑戦したいことが、まだまだたくさんありそうです。

